I-4

醍醐寺如意輪堂の立面と縁の構成に関する一考察

懸造り建築の基本構成に関する基礎的研究 6

Case study of Daigo-ji nyoirin-do

A study on the style and characteristic of "KAKEZUKURI"in Japan

重枝豊[1]，○河合晴香[1]

Yutaka Shigeeda[1], *Haruka Kawai[1]

１．醍醐寺如意輪堂の概要

醍醐寺は京都府の笠取山に伽藍が広がる真言宗醍醐派の総本山で，伽藍は麓の下醍醐と山頂の上醍醐で構成される．開祖聖宝によって貞観年間に山頂に創建された．如意輪堂は聖宝作の如意輪観音像が祀られ，三間四面檜皮葺で山頂部岩山上に建立された[i]．この時に准胝堂も上醍醐に建立されている．しかし，度重なる修繕と三度の焼失(1268,1361,1605)により，少なくとも三度は再建がされ，創建以降改変ついては諸説ある[ii]．

現状の如意輪堂は，桁行五間梁行三間妻正面で南面し，二手先組物，二重繁垂木，入母屋造柿葺きである．

２．先学の研究

浅野(1960)は，現状の如意輪堂が慶長 11 年(1606)の再建であるとし，『醍醐寺新要録』の，慶長再建時の記述「結構華美」[iii]について，「桃山時代の建築としては，装飾等の点に於いて，決して華美の部類のものとはいえない」とし，現状の正面は縦に延びた立面で，平面は規模が拡張されたのではとの見解を示す．修理報告書(1964)では，解体修理時の調査から，懸造部の地盤傾斜は当初からだが，石垣の造成は慶長時の修理[iv]とし，再建前の上屋は岩山部に建ち，現在より小規模であったと指摘する．しかし，鈴木(2002)は規模や平面形式は旧来と大差ないとし，懸造であるのも当初からだと指摘する．山岸(2002)も「三間四面の平面形式の伝統を守っていて，空間的な変化が窺われない」と述べている[v]．

３．研究目的

先学の研究では再建時における上屋の空間変化について検討されており，縁を支持する部材構成については修理報告書(1964)で懸造部の部材調査が記録されている．そこで，本稿では縁を支持する部材構成を懸造部と他の部分とで比較し検討することで，懸造を有する正面の立面構成にみられる特徴を明らかにすることを目的とする．

４．平面・立面の基本構成

4-1.平面構成の分析

平面形式は，南側三間が中央方一間を護摩壇とする礼堂，その奥一間通りが仏壇，背面一間通りは物入で縁は四周に廻る．正面中央柱間に双折両開き桟唐戸，両脇間は板戸で，両側面は前面三間を板戸，他二間横板壁，背面は中央間が引き違い板戸，両脇間は横板壁である．柱間寸法は，桁行五間と梁行両脇間は 2448 ㎜（8.074 尺）で，梁行は中央間のみ 3590 ㎜（11.847 尺）．柱径は入側柱が 348 ㎜(1.15 尺)，側柱が 409 ㎜(1.35 尺)である．

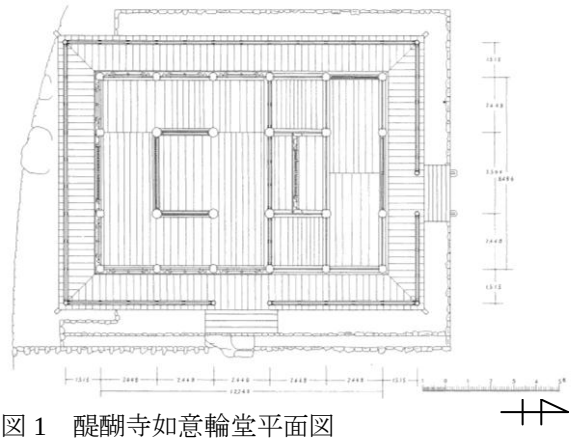

図 1　醍醐寺如意輪堂平面図

4-2.立面構成の分析

軸部は入側で通肘木・挿肘木を用い，組物は二手先で中備えは蓑束，軒は二軒繁棰で小天井，支輪がつく．堂内は身舎の柱が立て上せで高く組むが，切目長押上端から内法長押下端の高さと，梁行脇間・桁行の柱間寸法との縦横比はほぼ 1 : 1 である．梁行中央柱間寸法での縦横比は，3 : 2 と縦に長い．また，妻飾りは皿斗実肘木によって虹梁を両端と中央部で支持する．虹梁中央には大瓶束結綿付をのせている．

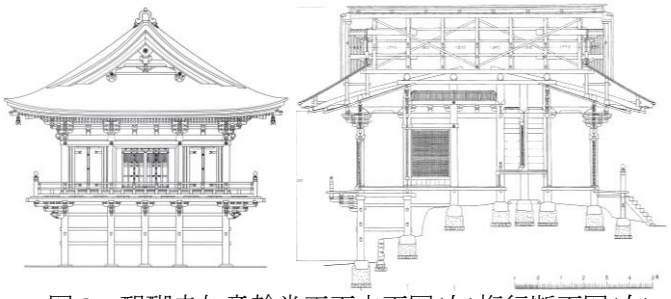

図 2　醍醐寺如意輪堂正面立面図(左)桁行断面図(右)

１：日大理工・教員・建築

4-3.小結

平面の柱間寸法は中央間が脇間の 1.5 倍よりややより広く，中備には蓑束が二本立つ．側柱径は梁行中央間の 0.1 倍と木割と比べると堂にしては細い．中央間での長押間縦横比は両側面に対して縦に長く，柱間装置や妻飾りによって側面よりも華美な印象を受ける[vi].

５.縁の支持方法

5-1.背面三間廻りの縁の構成

背面三間廻りの縁は束によって支持され，縁束には貫が通る．縁は切目縁で，背面は側柱と縁束の間に大引きを渡し，足固貫と縁框で床が張られる．また，両側面では側柱の縁根太から縁框まで大引きを渡し，さらにその中心に根太を一本通す.

5-2.前面二間廻り懸造部の構成

正面より二間通りは地盤が他よりも低く，石垣で段が組まれ，懸造によって支えられる．懸造部は中央間を二分割して柱を立て，柱径はいずれも 378 ㎜（1.25 尺）である．梁行では一段目，桁行では二段目が通肘木，他は挿肘木である．懸け柱上には台輪が廻り，縁根太･縁框を受ける桁材が台輪上で, 上屋柱を受ける.

5-3.前面二間廻りの縁の構成

縁は通肘木と挿肘木を用いた三手先斗栱で支持される．肘木の出は柱真から三手目斗を三等分している．二手目上の秤肘木の寸法は軒の肘木と等しく，肘木を受ける皿斗は二・三手目では巾が軒の側柱外秤肘木上巻斗巾と同寸．縁根太・縁框を受ける桁は前面より二列目の懸造部柱上より延び，縁下の眉欠き部分を斗が受ける. 縁框は懸造部貫と高さが同寸だが, 巾は広い[vii].二手目では秤肘木上の，皿斗，実肘木で縁根太を受ける．この縁根太は足固め貫と縁框の中心よりも外側で縁板を受ける．隅の斗栱一手目肘木は貫を足した丈とし，先には繰型絵・様が施される.

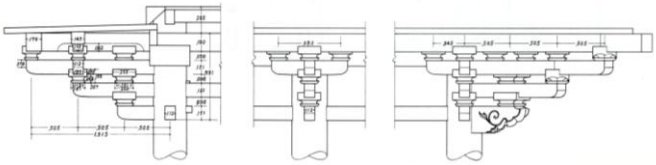

図 3 前面二間廻り縁斗栱詳細図(断面・正面・隅)

5-4.小結

懸造部の柱は上屋の側柱径と入側柱径の間の太さである．縁は三手先斗栱で支持する懸造部周囲の縁と縁束によって支持する背面側三間の縁がある．前者では懸造部での貫と同寸の通肘木が使用されている. また, 縁根太を受ける桁材は貫よりも幅が広いため，眉欠きにし，斗の寸法との調整を図っている．また，隅の一手目では他の二倍の高さの部材を用い，強度を増す.

６.考察

醍醐寺如意輪堂は，創建時以降三間四面の平面構成を踏襲する側面の立面構成に対して，正面では懸造・柱間装置と高さを強調し，妻飾りも合わせて華美に見せる立面構成が見られた．また，懸造部と縁の構成については，柱脚部の台輪を境に上屋と懸造部に分かれているが，ほぼ同寸の径の円柱を用いる．懸造部では貫や通肘木を用いて柱を緊結し，部材の合理化を図る一方で，縁根太は秤肘木・実肘木で支持するが，正面からは縁框や三手目秤肘木で隠れる．縁を斗栱で支持するために貫より巾広の桁を用いるが，眉欠きによって斗の寸法は変えないように配慮している．また，隅一手目の肘木は丈を二倍にして，丈の高さを感じさせないよう繰形を施す．このように，立面の意匠上に配慮しながらも, 強度を増す工夫がされたと考えられる.

７．まとめ

山頂に崖側の縁を斗栱で支持することは風雨の影響を受けることが多く，修理時には腐朽により大多数の部材を交換したという．しかし，古制を踏襲する側面に対して，正面では上屋を懸造で，懸造部の縁を斗栱で支持することによって，より一層垂直性を高め，上屋の正面立面と相まって華やかな立面構成を実現していると考えられる.

図は参考文献①より引用した.

＜参考文献＞①『重要文化財醍醐寺如意輪堂修理工報告書』/京都府教育庁指導部文化財保護課編/京都府教育委員会/1964　②『重要文化財　醍醐寺　開山堂・如意輪堂　修理工事報告書（災害復旧)』/京都府教育庁指導部文化財保護課編/京都府教育委員会 1999　③「上醍醐の建築」『仏教芸術』四二　特集醍醐寺/浅野清/毎日新聞社/1960　④『日本名建築写真選集. 第 9 巻　醍醐寺』/藤井恵介/新潮社/1992.9　⑤『醍醐寺大観　第一巻』/鈴木嘉吉，山岸常人/岩波書店/2002.10.29　⑥『醍醐寺新要録　上巻』/醍醐寺文化財研究所/法藏館/2001

[i] 貞観 18 年(876)で，仏壇下地盤に鎮壇があったことから創建時より位置が変わらないとされる.

[ii] 藤井（1992）は「創建建築は三間四面であったので，今はよりは多少大きなもの」とあり，現状よりも大きいとの意見を示す.

[iii] 『醍醐寺新要録』で慶長再建時について「結構華美前代のものに十倍する」と記述があったこと

[iv] 現状の岩山部には焼土層や焼け跡の残る束石が使用されている一方，岩上には焼土層や礎石に焼土層は見られず，懸け柱の礎石は上には岩上と異なり漆喰叩きがみられない

[v] 山岸(2002)「聖宝自作の如意輪蔵が安置されていたという由緒が守られたからだろうか」

[vi] 准胝堂古図と共通して，内陣空間を板壁とし，礼堂空間を板扉とする古制を踏襲しているとみられる

[vii] 縁框を受ける皿斗が不自然に内側を欠込まれているため，修理報告書(1964)では後世に框を貫と同寸から巾を広く変えたと指摘する